２０１５年１２月２１日
先日の金曜日夜に「アイヌ文化に縄文文化との接点はあるのか？」と言うテーマの講演会を聞きに行ってきた。大島直行という札幌医大客員教授で北海道考古学会会長をやっている方が講師をしていた。この講演会はアイヌ文化を紹介しているアイヌ民族主催の講演会であったが、私は特に縄文時代を含めた日本民族の古代史に興味を持っていたため参加させて頂いた。講演の内容はアイヌ文化の精神史に縄文文化の精神史が影響を与えているかをテーマに扱ったものだが、大島先生の考え方は非常に面白く、また有意義であり大変参考になった。縄文文化を共生シンボリズムと捉えこれに続く弥生文化をアニミズム(シャーマニズム)ととらえて、こうした文化がどういう風に確立されてきたかを御自分の考え方とともに語りアイヌ文化の「送り」の考え方にどういう影響を与えたかを話しておられた。大変ユニークな考え方をしておられ興味を持ちました。
私は日本民族の成り立ちを素人ではありますが、以下のように考えておりましたが、精神文化についてはあまり考えておりませんでした。縄文時代をはじめ精神文化の変遷は日本民族を理解する上で重要であることを考えさせられました。
私はもともと日本民族が、教科書で習ったような、決して単一民族であるとは思っておりません。最近のミトコンドリア遺伝子の研究から、日本人は日本列島が陸続きであった頃から、海で隔てられてからも民族移動の只中にさらされていたと思っております。北方シベリア地方からは今のアイヌ民族の祖先が樺太経由で日本列島に渡ってきており、1万年に及ぶ縄文時代を通じて、今の関西から、九州に拡散していったと考えております。当時は多分少人数で部族を作って浸透して行ったのではないかと思います。この頃はまだ日本列島には他の民族も少なく大きな争いもなく進んでいったと考えられます。また朝鮮半島経由で日本の関西地方、北陸地方に入ってきた民族、中国からは中国南部の民族が海を渡って流入して九州から中国地方に渡ってきたのではないかと思います。また南方ポリネシア地方の民族も台湾、琉球経由で九州地方に流入してきていると思われます。これらの南方系の民族も逆に日本の東北地方、多分北海道まで移住して行ったのでしょう。この辺はＤＮＡレベルで検証していく必要があるかと思います。いずれにしても日本の １万年以上昔、旧石器時代以前から日本列島には多くの民族が流入し、縄文時代、弥生時代以降にわたって民族の混交が行なわれていたと思われます。こうしたことから日本民族は単一民族ではなく他民族が入り混じった民族と思われます。こうした観点で見ると、今の他外国のほうが混血度は低いのではないかと考えられます。当時まだ国家と言うものはなかったと思いますが日本は多民族国家ではなかったのではないでしょうか？
中国の魏志倭人伝に記されているという卑弥呼が和国統一を行なう前(といっても関西地方までと思いますが)丁度縄文期から弥生期にかけて和国騒乱の時代と言うのは、こうした多部族がそれぞれじぶんの領地と言うより居場所争って小国と言うより部族間騒乱が多発していた時代かと思います。
そして卑弥呼が九州から関西地方にかけて緩やかな統一をして耶馬大国が出来たのが、この部族抗争を収めたことではないまと思います。耶馬大国とはこうした緩やかな今で言う連合国であったのかもしれません。さすがに卑弥呼はどこにいたかは未だに議論の的となってはおりますが！
そしていよいよ多分大陸の騎馬民族かと思いますが、天孫降臨の時代となり九州を中心に今の天皇家の祖先が日本列島に砦というようなものを作って九州を支配下に置いたのでしょう。さてそこから神武東征の時代になり、徐々に瀬戸内を支配下におさめながら今の和歌山県奈良地方に大和朝廷を作り、関西九州を統一したと思われます。このときに九州関西地方にいたアイヌ民族は徐々に北方、東北地方に追いやられ、熊襲民族は南方に追いやられていったのではないかと思います。熊襲は琉球に吸収され、アイヌ民族はさらに今の北海道に追いやられたと思います。実は東北には縄文早期、８０００年位前にすでに三内丸山遺跡で知られる東北文化圏とでもいうべき民族が国を作っていたと思われ、アイヌ民族はこの地にも定住できなかったと思われます。つまり縄文初期には三内円山地方はすでに定住民族がいてアイヌのような採取狩猟民族は定住することが出来なかったのでしょう。
こうして弥生時代、古墳時代、大和奈良時代になると日本列島は関西文化圏、東北文化圏、アイヌ文

化圏というような区分けが出来たと思います。われわれの教科書では天皇直系の歴史しか残っていませんので東北文化圏も大和朝廷から見た程度しか歴史は残されていません。アイヌも恐らく北海道文化圏を作っていたと思いますが、アイヌは国家機構を作らなかったため、さらに歴史上では何も語られていないのでしょう。
先に示しましたように縄文時代早期でもすでに三内円山では大きな定住集落を形成していたと思われます。最近の発掘では例えば黒曜石のナイフを製造する専門職人がいたことや、稲作ではありませんがどんぐりのような植物を栽培して食料を備蓄していた等の遺構が残されており、職業の分業等がすでに行なわれていたと見られています。こうした組織的な活動をするためには、当然定住して職業経験、伝授が行なわれていたと考えられ、国家組織等が発達していたと見るべきかと思います。また黒曜石は海を渡ってロシアの海岸地区からも発掘されていると見られ、三内丸山文化は縄文初期から日本国外とも交流が盛んにあったと見るべきです。決して縄文時代は交通手段がなく日本国内だけで人々は活動していたのではないと思われ、もっと活発に海外との交流があったと見られます。教科書の示すように狩猟採取経済で細々と国内をうろついていたわけではないのではないかと思います。今から８０００年前と言うと文明発祥の地エジプトより古い、中国４０００年の歴史より古いといっても良いかもしれません。
さらに最近では中米のエルサドバトルでも１万３０００年前の縄文式土器が発見されているなどの話も伝わってきたのを考えると、古代はもっと活発に海外との交流が行なわれていたのではないかと思われ、決して日本列島の中だけで閉じていた文化ではないのではないかと思います。
こうしたことから教科書は時間軸に沿って記述されているけれども、近代はともかくもっと古代から水平軸に沿って記述すべきかと思います。試験勉強のような年代暗記型の教育ではなく古代から世界との交流があったことを伝えるべきであり、物、人の移動に伴って必ず日本の精神文化も移動していると思われ、さらにこうした痕跡を世界に確証を探してみるのも面白いと思われます。先に紹介した大島先生など日本文化の精神史を研究されている方々には、特に日本の精神文化の広がりを世界に求めてもらえないかと思います。１万３０００年近くの縄文土器が発掘されているということは、定住生活をして何らかの組織だった集団がいたことになり、すでに文明と呼べる状態であったとすると、もしかしたら世界の四大文明よりも早い時期に日本の文明があったことになり世界の歴史認識が大きく変わると思います。私自身こういった観点から、証拠を探しを含め、縄文文化またそれ以前の旧石器文化の勉強をしたいと考えております。
実は昨日、先の大島先生に日本の精神文化が海外に広まっているのではないか、先生のお考えを伺いたいとのメールを送ってしまいました。多分この素人が何をかいわんやで、返事もないかもしれないと思いながらですが！